

現代社会におけるローカル・コモنزの意義

The significance of local commons in modern society

川田 美紀 (KAWATA Miki)

コモنزに関する研究は、近年、環境経済学や生態人類学、環境社会学、環境民俗学など多くの分野ですすめられている。それらの研究は、資源の利用価値の捉え方という点から、大きく2つに分類することができる。

1つは、生業や生計維持と密接に関係しているコモنزであり、これまでの多くのコモنز研究が分析対象としてきたコモنزはこのタイプに該当する。それに対して、楽しみや遊びの要素が含まれたコモنزに注目しようとする研究もみられるようになってきた。本研究では、このような資源に対する2つの異なる価値の捉え方に着目し、生活条件が大きく変化した現代の日本社会におけるローカル・コモنزの意義を明らかにすることを目的としている。

平成 24 年度は、沖縄県国頭郡今帰仁村古宇利地区をおもな調査地として、さまざまな自然資源の共同利用・管理の実態、および過去から現在にかけてのその変遷を調査した。調査地の主要な生業は、農業と漁業であり、生業や生計維持と密接に関係している資源の共同利用は、過去と比較すればケース数は減少しているものの、現在も継続しておこなわれていることがわかった。また、生業や生計維持の観点からは、もはや利用する必然性がなくなっていると思われるような資源利用も、根強くおこなわれているものが多数あることがわかった。

後者の資源利用には、個人的な楽しみや遊びとしておこなわれているものばかりではなく、地元の人びとが「毎年この時期には(このような資源利用を)することになっている」と説明するような、いわば、ルーティン化されているものが少なくなかった。さらに、誘い合って採取に出かける、採取したものをおすそ分けするというように、人との関わりが、これらの資源利用のさまざまな場面に組み込まれていた。具体例としては、春先に海辺に生える海草を採りに行く際、友達と誘い合って出かけたり、特別な行事がある時に、皆に振舞うことを目的として魚を獲りに行くなどが挙げられる。

今後は、このルーティン化されている資源利用に注目してさらに調査をすすめるとともに、これまで調査してきた地域とは環境条件や生業形態が異なる複数の他の地域でも、資源の共同利用・管理に関するデータを収集する。それらの分析を通して、生活条件が大きく変化した日本の現代社会におけるローカル・コモنزの意義を検討する。